

日付:2015年12月20日／聖書:ルカによる福音書1:26～38

説教:「恐れることはない」

ここは「受胎告知」と言われるところ。突然現れた天使に恐れおののけないはずはない。神からの告知に恐れるマリアであるが、この「恐れ」には、どのような意味があるのか？ 「恐れ」には、自分が想定していない出来事に不安を抱き恐れるわけであろう。

ただ、私たちが想定する神との関係性は、私たちの側から思いを馳せ、私たちの側から神に接近し願い事を問い、また私たちの側から神を遠ざけ、神との関係性を断つ。それが私たちの想定している神との関係性ではないか。こちら側からあちら側へ、すなわち人間側から神の側へ一方的に。お香を焚(た)いてみたり、お供え物を奉げたりして神を喜ばそうとする。こちらの願いを聞き入れて頂こうとしたり、また神の怒りを抑えようとしたりする。多くの宗教もまた、そういうものだったりする。しかしここでは、神のために人間が何かをしていくと思っていたところに、神の方から近づいて来られたということが記されている。聖書が記す“神”とは、まさにそう言う事である。

ヨハネの手紙一4章9, 10節「神は、独り子を世にお遣わしになりました。その方によって、わたしたちが生きるようになるためです。ここに、神の愛がわたしたちの内に示されました。わたしたちが神を愛したのではなく、神がわたしたちを愛して、わたしたちの罪を償ういけにえとして、御子をお遣わしになりました。ここに愛があります。」 私たちの方から神へと思いがちだが、聖書は神の方から私たちの側へ来てくださったと記す。そのことに気づいて行くこと、受け止めて行くことが信仰の始まりであり、神の恵みそのものである。

ただ、そのことを私たちが真剣に思う時にあのマリアのように「不安、恐れ」が生ずる。私たちは、サンタクロースを迎えるようにストレートに神を迎えることの出来ない弱さがあるもの。サンタクロースは、この世の出来事であるから受け入れやすいものであろう。しかし神は、あの世の出来事であり、あの世に居られる神が私たちのこの世の世界に介入して来られるということであるから、自ずと「不安、恐れ」は起こるものである。

マリアは、この世の状況を思い浮かべたからこそ、「恐れ」を感じたのではないか？ いいなずけのヨセフには何と説明すればよいのか？ 信じてくれるであろうか？ 両親は？ おしゅうと方は？ 世間は？ ……この世に対する「恐れ」が、マリアにはあつたはずである。しかしマリアは、この世の道理に対し、神に委ねていく決心をする。「マリアは言った。「わたしは主のはしためです。お言葉どおり、この身に成りますように。」」(神谷)